

# 日本に伝来する17-19世紀の綴織— 中国製・日本製の裏付けがとれる現存作例を探して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 雅子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15014/0000000307">https://doi.org/10.15014/0000000307</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



# 日本に伝来する 17-19 世紀の綴織

—中国製・日本製の裏付けがとれる現存作例を探して—

Tapestries of the 17th-19th Centuries Handed Down in Japan:  
Extant Pieces with Evidence of Japanese or Chinese Production

Masako Yoshida 吉田 雅子

## はじめに

日本の祭礼には中国と日本で織られた綴織が複数伝来しているが、江戸時代に日本で制作され始めた綴織の大半は、京都の祇園祭の中に伝来している。祇園祭の綴織は、18世紀末から19世紀の前半に中国の綴織をモデルにして日本で綴織が制作されていたことを示唆しており、江戸時代に綴織が制作され始めた初期の段階を示すものとして大変貴重である。中国製と日本製の綴織を識別するためには、祇園祭に伝来する中国製の作例と、それを元に日本で制作された品々を比較検討することが極めて重要であるが、この種の作例に関しては、ほとんど本格的な調査がなされてこなかった。日本製のコピーと中国製のオリジナルを識別することが、大変困難だからである。

この種の問題を扱う場合は、まず中国製・日本製の裏付けがとれる作を調査し、それらの特徴を洗い出して比較することが肝要である。筆者はこの作業を、二段階に分けて行いたいと思う。第一は、一次史料等を用いて中国製・日本製の裏付けがとれる作を洗い出し、それらの中から現存する作を選び出すことである。第二は、現存するそれらの実物作品を調査して、その図様、材質、技法等の特徴を明らかにする事である。本論はこのうちの第一段階を行うことを目的とするもので、具体的には一次史料などを用いて調査すべき現存作例を注意深く探し出し、それらを最終的に一覧にとりまとめるまでを目標としたい。

2019年の「一次史料からみる日本製の江戸時代の綴織」において、筆者は日本製であることが裏付けられる江戸時代の綴織に関して、主に『増補祇園会細記』『祇園会占出山神具入日記』『西陣天狗筆記』をはじめとする一次史料を用いながら検証し、その大きな流れをとりまとめ

た<sup>1</sup>。本論の日本製綴織に関する内容は、2019年のこの拙稿と若干重複する部分があることを、ここであらかじめお断りしておく。本論は2019年の拙稿に継ぐもので、特に『増補祇園会細記』に注目し、日本製コピーと中国製オリジナルを識別するための鍵として、この記録を用いてゆく。そして『増補祇園会細記』が記された19世紀初頭の時点で、どのような中国製・日本製の綴織が祇園祭に存在していたのか、それらはどのように用いられていたのか、それらにはどのような主題が表されていたのか、当時日本ではどの程度の綴織が織り出せるようになっていたのかについて、考えを巡らせて行きたいと思う。

## 祇園祭に伝来する綴織に関する先行研究

周知の通り祇園祭は京都市の八坂神社(旧祇園社)の夏の祭礼で、日本三大祭の一つである。その祭礼は明治まで祇園御霊会と称され、その始まりは貞観十一年(869)に京都で疫病が流行した時、神泉苑に66本の鉾を立てて神輿を神泉苑に送り、厄災の除去を祈ったことにあるとされている<sup>2</sup>。次第に規模が大きくなり、鎌倉時代末には山鉾が作られるようになり、南北朝期にその形が整えられた<sup>3</sup>。山鉾は疫神が依りつく依代で、その趣向を凝らした装飾は毎回新しく作られ、終わったら壊したり焼いたりして破棄された。山鉾の飾り物の趣向は応仁一年(1467)にはすでに定まり、山鉾は神の依代として神聖視されるものから、能曲の故事などを題材とするさまざまな趣向を表現する舞台へと次第に変わっていった<sup>4</sup>。華麗な懸装品で装飾された山鉾は都を引き回されたが、懸装品の多くは海外から舶載された珍しい染織品や、日本で制作された貴重な染織品であった。本論で扱う綴織も、そのような山鉾を飾っていた品々である。祇園祭の染織品が掲載されている出版物は複数あるが、そのうち本論に

参考になるとと思われるものを年代順に拾い上げてみたい。

(1) 若林史明『祇園会山鉾大鑑』昭和五十七年(1982)<sup>5</sup>

明治二十八年(1895)に下京に生まれ、風俗研究に取り組んで祇園祭の山鉾の調査に生涯を捧げた若林史明氏は、各山鉾町を廻って史料を収集し詳細な記録を取っていたが、すべての山鉾調査を終えることなく昭和二十四年(1949)に没した。その調査資料は八坂神社に奉納され、約30年後に八坂神社から『祇園会山鉾大鑑』として発行された。先祭は月鉾と油天神山以外の山鉾がすべて掲載されており、後祭は北観音山と八幡山のみが記されている。すべての山鉾を網羅するものではないが、当時あった29基のうち19基に関する、大正期から昭和前期の大変詳細な資料である。江戸時代の史料類を駆使しながら、調査当時に使用されていた掛物や、当時すでに使用されなくなっていた古い掛物に関して取りまとめられている。「本邦にて製織したるもの」などの記述が散見されるが、なぜそれが日本製であるのかは記されていない<sup>6</sup>。

(2) 太田英蔵「綴錦」『祇園祭染織名品集』所収、昭和四五年(1970)<sup>7</sup>

染織史研究者である太田英蔵氏は、「綴錦」の中で祇園祭の綴織の代表作例を取り上げて短く解説している。一次史料に関しては、若林氏の『祇園会山鉾大鑑』を参照するものが多い。中国製・日本製と推定している品が一部あるが、文面が限られているせいか、理由が記されていないものが大半である。だが、一部のものには理由が記されている。たとえば放下鉾の作に関しては、不自然な岩坡の表現が西陣産の作に近似しているため、この作を西陣製とする田中緑紅の説は首肯できるという旨を述べている<sup>8</sup>。脚注がないため、太田氏が参照した田中緑紅の出版物が何かわからなかった。そこで出典を探したところ、それは大正から昭和にかけて郷土史・民俗学を研究した田中緑紅氏の『京祇園会の話』<sup>9</sup>という短文のカタログであることが判明した。だが、このカタログにも日本製、中国製とあるだけで、その論拠はやはり記されていなかった。

(3) 祇園祭山鉾連合会『祇園祭山鉾懸装品調査報告書—渡来染織品の部』平成二四年(2012)<sup>10</sup>

(4) 祇園祭山鉾連合会『祇園祭山鉾懸装品調査報告書—国内染織品の部』平成二六年(2014)<sup>11</sup>。

祇園祭の懸装品の調査には、複数の研究者が長年関わってきた。昭和六一年(1986)から平成二十三年(2011)

の調査結果のうち外国製の染織品をまとめた報告書が、カラー図版つきで2012年にまとめられた。現在山鉾町に現存する染織品を知るのに好都合な資料である。解説の大半は吉田孝次郎氏と梶谷宣子氏が記されている。中国製と推定された綴織が多数掲載されているが、カタログであるため解説文が短く、推定理由が記されているものは多くない。

渡来染織品の報告書にひきつづき、2014年には日本製の染織品に関する報告書がとりまとめられた。その中心になったのは藤井健三氏で、この報告書には日本製と推定される綴織が複数含まれている。だが、やはり文字数の関係で推定理由は記されていない。

以上、祇園祭の染織品に関して述べてきたが、大津祭のカタログにも見るべきものがあるので、以下に紹介したい。

(5) 河上繁樹「曳山を彩る幕—大津祭の懸装品」『町人文化の華—大津祭』所収、平成八年(1996)<sup>12</sup>

染織史研究者の河上繁樹氏は、解説の中で源氏山に伝来する百子嬉遊図綴織と花蝶図綴織をとりあげ、両者には中国製と思われる作とそれをコピーした日本製と思われる作があることを述べている。河上氏は一次史料と実物資料の両方からこの問題にふれられ、中国製と日本製の綴織には糸の撚り方向に違いがあると述べている。河上氏が指摘された撚り方向の相違は複数の研究者が感じていることであり、筆者もまたそのように感じる者の一人である。このような説を裏付けるためにはさらに多くの確実な資料を観察する必要があり、それがまさに筆者が行おうとしている本論をはじめとする基礎調査である。

以上をまとめると、以下が言える。多くの先学が祇園祭の調査に関わられてきたが、内容が大変複雑で作品数が多いため、それらをまず取りまとめることにこれまで多大な労力が割かれてきた。そのため個々の研究者の経験値に基づいて、中国製・日本製と推定される事がほとんどで、それがカタログ類に記されて踏襲されてきた感が否めない。この状況を一步先に進め、日本製と中国製の綴織を確実に識別するためには、中国製・日本製であることが史料等によって裏付けられる作をとりまとめ、それらの作に関して実物調査を行って比較検討する必要がある。そこでまず肝要なのは、数ある関連史料の中から信憑性が高いものを採り当てることである。ここで筆者が着目するのが、次に紹介する『増補祇園会細記』である。

## 『増補祇園会細記』に記された中国製・日本製の綴織

『増補祇園会細記』は、祇園祭の山鉾町の一つである役行者山の町内に住んでいた藤田吉右衛門貞栄によって記された、祇園祭に関する詳細な記録である。宝暦七年(1757)の『祇園御霊会細記』が本書の母体になっている。貞栄は『祇園御霊会細記』に依拠しつつ、諸史料をもってそれを補いながら大幅に加筆して、『増補祇園会細記』(以下『増補細記』と略称)を著した。その凡例には文化九年(1812)、奥書には文化十一年(1814)の年紀が記されている<sup>13</sup>。今日の山鉾町で祇園祭に関わる住人の多くが、どの鉾町がどのような掛物をどこで作ったかよく知っているように、貞栄は当時の鉾町の状況を熟知していた。『増補細記』を詳細に読むと、貞栄は山鉾町を歩いて、当時の様々な情報を聞き集めていたことがわかる。自らの町内である役行者山の部分は特に詳細に記述されているが、それ以外の町内の状況に関しても細かな記録を残しており、当時の状況を示す極めて重要な一次史料の一つと言ってよい。『増補細記』の凡例部分には、この記録に用いる用語の定義が記されており、その中に以下があることが特に注目される<sup>14</sup>(これ以下の引用にある下線は、筆者による)。

- 一 山鉾鋸附之部に水引見送前掛等に地綴織と記せしハ、近世京師二而織出す処乃綴錦なり。

このように、本書における「地織」とは、このところ京都で織り出されている綴錦のことであると明記されている。もう一つの注目すべき用語は、本書の様々な部分に見受けられる「唐織」という語である。『増補細記』を注意深く読んでいくと、「唐織」は「地織」にたいする語として用いられており、中国製の染織品を意味していることがわかる。例えば八幡山の場合、胴幕は「地織綴錦」、見送は「唐織綴錦」と記されており、同じ綴錦であっても日本製と中国製が明らかに識別され、書き分けられている。従って『増補細記』を詳細に読んでいくことにより、当時山鉾町にあった中国製と日本製の綴織が浮かび上がってくるのである。

今日綴織と呼ばれるものは、江戸時代には「綴錦」と称されることが多く、『増補細記』には「綴錦」の表記が複数見られる<sup>15</sup>。また『増補細記』には、「縷錦」の表記もあるが、これは現在の綴織の別称である。そこで筆者は『増補細記』を詳細に検討し、「綴錦」「縷錦」と記載されたもののうち、さらに「地織」「唐織」と明記されているものを抜き出して、その記述を取りまとめた。その結果、19件(表1)の中国作品と、26件(表2)の日本

作品の計45件が浮かび上がった。これらの品々は、『増補細記』が記された1814年の時点で祇園祭の中に伝来していた中国製と日本製の綴織である。

それでは、これらの綴織は祭礼の中でどのように用いられていたのだろうか。『増補細記』の記載(表1・2)を見てゆくと、以下がわかる。中国製の綴織は19件のうち10件、約半数の品が見送(山鉾の後方に掛ける幅広の掛物)に用いられていた。それに次いで4件が前掛(山鉾の前面に掛ける幅広の掛物)、3件が胴幕(山鉾の左右に掛ける幅広の掛物)、2件が水引(山鉾の上方に巡らす細長い掛物)に供されていた。日本製の綴織を見ると、26件のうち11件、やはりその多くが見送に仕立てられていた。追って7件が胴幕で、前掛と水引はともに3件である。このように、中国製も日本製もほぼ同じ傾向を示している。見送は山鉾の後ろに掛ける最も華麗な掛物で、山鉾が去って行く際にその後ろ姿として長く人目に焼きついてゆく。このことから、綴織は見送に用いるのに十分な高い価値を有した織物と、当時すでに受け止められていたことが窺われる。

特に注目されるのは、日本製綴織の大半が見送・胴幕・前掛といった大型の掛物に用いられていることである。後に『増補細記』の品のうち現存する作例に関して述べてゆくが、そのうち保昌山の日本製見送は、綴織部分が203 x 159cm、橋弁慶山の胴幕のそれは118 x 249 cmであり<sup>16</sup>、織幅が2mを越える綴織がこの時期に日本で制作されていた。1814年にはすでにこのような広幅で大型の綴織を多数織り出すことができるほど、日本の綴織技術が向上していた事が窺われる。

では、これらの綴織にはいったい何が表現されていたのであろうか。『増補細記』に記載された主題(表1・2)をまとめると、以下になる。中国製綴織の主題は、龍が6件、花鳥が5件、唐子<sup>17</sup>が3件、花卉<sup>18</sup>が3件、仙人が2件である。日本の綴織は、龍が8件、人物が4件、花鳥が3件、唐子が3件。残りは1件ずつで、仙人、鳳凰、花卉、葵祭である<sup>19</sup>。中国製・日本製ともに一番多い主題は龍で、それに花鳥や唐子が続く。

祇園祭を司る八坂神社は龍神に関連しているため、龍の主題が複数用いられることは頷ける。花が咲きみだれ鳥が飛翔する花鳥図は大変華麗であり、依代である山鉾に疫神を惹きつけて憑依させるのに適した主題と言える。また、中国の多くの子どもたちが遊ぶ図様(唐子嬉遊図)は、子孫繁栄を祈念する吉祥の図案であったため、それが疫病退散の祭礼に多数用いられたのも自然の成り行きといえよう。

ちなみに、ここでいう日本製綴織の花鳥とはいったいどのような花鳥なのか、大変気になるところである。後に述べる現存作例を見てゆくと、それらの多くは鳳凰と

表1 『増補細記』に記載された中国製綴織（唐織）

所蔵先	掛物種別	織物	主題	増補の記載：（）内は原ルビ、<>内は割書き、「々」は「々」に改めた	現存状況
長刀鉾	見送	唐織綴錦	花鳥	長刀鉾の銚附の条 見送 <唐織綴錦、花鳥のもやう、へり猩々緋>	
ト出山	見送	唐織綴錦	花鳥	ト出（ウラデ）山の古銚附の条 古見送 <唐織綴錦、花鳥のもやう>	○
山伏山	見送	唐おり綴錦	雲龍青海波	山伏山（ヤマフシヤマ）の銚附の条 見送 <唐おり綴錦、紅地もやう雲龍青海波、色糸いろいろ、所々或ハ蓮花の様なる花形のもの、又徳利のようなもの、或ハ土拍子のような物、色糸にてちらし付に有之、縁ハ金ささへり、此綴錦ハ幅丈たつふりといたし、甚見事也>	○
月鉾	見送	唐織綴錦	百子	月鉾の銚附の条 見送 <唐織綴錦、もやう百子、へり猩々緋>	
木賊山	見送	唐織綴錦	花鳥	木賊山（トクサヤマ）の銚附の条 見送 <唐織萌黄地綴錦、もやう花鳥、へり猩々緋、金糸さやがた丸龍の縫>	○
螭螂山	見送	唐織綴錦	龍	螭螂山（カマキリヤマ）の銚附の条 見送 <唐織、紅地龍、綴錦>	
菊水鉾	見送	唐織つづれのにしき	花鳥	菊水鉾（キクスイホコ）の銚附の条 見送 <唐織つづれのにしき、藍地、花鳥のもやう、へり猩々緋>	
船鉾 （現船鉾）	前掛	唐織綴錦	浪に登り龍	船鉾（フネボコ 新町綾小路下ル袋屋町）の銚附の条 前掛 <唐織紅地綴錦、浪に登り龍もやう、へり猩々緋>	○
橋弁慶山	前掛	唐織綴錦	真向龍	橋弁慶山（ハシベンケイヤマ）の銚附の条 前掛 <藍地、唐織綴錦、真向龍のもやう。左右金地綴錦、もやう花の丸、尤地をりなり>	
八幡山	見送	唐織綴錦	婦人唐子 琴棋書画	八幡山（ハチマンヤマ）の銚附の条 見送 <唐織綴錦、紅地婦人唐子琴棋書画もやう、へり猩々緋>	○
鈴鹿山	前掛	唐織綴錦	仙人	鈴鹿山（ススカヤマ）の銚附の条 前掛 <唐織金地綴錦、仙人のもやう、左右に萌黄羅紗を付ル>	○
鈴鹿山	胴幕 （左右）	唐織綴錦	西王母、壽老人	鈴鹿山（ススカヤマ）の銚附の条 左右胴幕 <前掛と同金地綴錦、もやう西王母壽老人等、其他いろいろのもやうあり、甚見事成もの也>	○
観音山 （現北観音山）	二番水引	唐織綴錦	牡丹	観音山（クハンランヤマ新町六角下ル町六角町）の銚附の条 二番水引 <唐織紅地綴錦、もやう牡丹>	○
役行者山	前掛	唐織綴錦	岩に牡丹蝶	役行者山（エンノキヤウシヤマ）の銚附の条 前掛 <中ハ浅黄地、唐織綴錦、岩に牡丹蝶のもやう。左右ハ紅地登り龍、下ニ岩水等あり。へりハ猩々緋也>	○

役行者山	二番水引	唐織綴錦	龍、草花	役行者山（エンノキヤウシヤヤマ）の銚附の条 二番水引 <四方とも唐織綴錦。正面ハ萌黄地、龍のもやう。左右ハ紅地、龍のもやう。後ハ紅地、草花のもやう>	
役行者山	胴幕 (左右)	唐織綴錦	真向龍、小龍	役行者山（エンノキヤウシヤヤマ）の銚附の条 左右胴幕 <唐織綴錦、左金地真向の龍中にあり、脇に小龍あり、裾にハ岩に水珊瑚珠水晶（サンゴジュスイシヤウ）等なり。右ハ紅地真向の龍中にあり、脇に小龍、裾にハ岩水珊瑚珠水晶等なり、脇につづれ、もやうハ鳥雲岩水等なり。へり黒羅紗>	○
黒主山	胴幕 (左右)	唐織綴錦	草花、蝶	黒主山（クロヌシヤマ）の銚附の条 左右胴幕 <唐織綴錦、金洲さき、地ハ赤桃色白浅黄千草等のほかし。其上に模様あり、雁緋（カンヒ）か松本せんのみことき草花に飛蝶あり。左右の脇猩々緋、無地花色房付>	○
黒主山	見送	唐織綴錦	花鳥	黒主山（クロヌシヤマ）の銚附の条 見送 <ニツあり、隔年に出す。各々唐織綴錦なり。一ツハ花色地花鳥のもやう、一ツハ紅地百子。いつれも幅丈ゆつたりとし、甚見事なる物也>	○
黒主山	見送	唐織綴錦	百子	黒主山（クロヌシヤマ）の銚附の条 見送 <ニツあり、隔年に出す。各々唐織綴錦なり。一ツハ花色地花鳥のもやう、一ツハ紅地百子。いつれも幅丈ゆつたりとし、甚見事なる物也>	○

【註】放下鉾の銚附の条に以下がある。見送 <唐縫綴錦、もやう唐子遊>。ここには唐織ではなく、唐縫とある。当時の人々は唐織と唐縫を混用していた可能性があるが、念のためこの作はリストから外した。

役行者山の見送の項に、一つは唐織、、また一ツの見送ハ綴錦、、とあるが、両者とも唐織でありかつ綴錦であるとは記載されていないため、リストから外した。

橋弁慶山に現存する前掛は、綴錦で藍地龍模様であり、この点は『増補』の記述と合致する。だが『増補』には左右金地綴錦とあるが、現存する前掛は左右に藍地の綴錦がついており、確実に『増補』の記述の作であると確定できないため、ここでは現存作例なしとした。

表2 『増補細記』に記載された日本製綴織（地織）

所蔵先	掛物種別	織物	主題	増補の記載：（）内は原ルビ、<>内は割書き、「々」は「々」に改めた	現存状況
太子山	水引	地織縷錦	浪に龍	太子山の銚附の条 文化十一歳甲戌六月新調、宵夜銚、水引 <地織縷錦、紅地浪に龍のもやう>	○
白楽天	見送	綴錦、地をり	龍鳳凰	白楽天の銚附の条 見送 <綴錦、模様龍鳳凰、但シ地をり>	類品あるが確定できない
破琴山 (現伯牙山)	胴幕 (左右)	地おり綴錦	花鳥	破琴(コトハリ)山の銚附の条 胴幕 <左右とも地おり綴錦 花鳥のもやう>	○
破琴山 (現伯牙山)	見送	地織綴錦	八仙人	破琴(コトハリ)山の銚附の条 見送 <地織綴錦、花色地、八仙人のもやう>	○
ト出山	見送	地織綴錦	花鳥	ト出(ウラデ)山の銚附の条 見送 <地織綴錦、花鳥のもやう>	○
鶏銚	見送	地をり綴錦	龍	鶏銚の銚附の条 見送 <地をり綴錦、もやう龍>	
霰天神山	見送	地織縷錦	浪二龍	霰天神山の銚附の条 文化十二歳己亥六月新調、見送 <地織縷錦、もやう浪二龍>	
木賊山	前水引	地をりつづれ	鳳凰	木賊山(トクサヤマ)の銚附の条 前水引 <地をりつづれ、もやう鳳凰>	
木賊山	胴幕 (左右)	地織つづれ	不明	木賊山(トクサヤマ)の銚附の条 左右胴幕 <地織つづれ>	
蟪蛄山	左右幕	地織綴錦	唐草小鳥	蟪蛄山(カマキリヤマ)の銚附の条 左右幕 <地織綴錦、白茶地、唐草小鳥のもやう>	
蘆刈山	前掛	地織綴錦	人物	蘆刈(アシカリ)山の銚附の条 前掛 <地織綴錦、藍地、もやう人物>	
孟宗山	前掛	地をり綴錦	百子	孟宗山(モウソウヤマ)の銚附の条 前掛 <地をり綴錦、もやう百子>	
孟宗山	胴幕 (左右)	地をり綴錦	人物	孟宗山(モウソウヤマ)の銚附の条 左右胴幕 <地をり綴錦、もやう人物>	○
保昌山	見送	地織綴錦	人物	保昌山(ホウショウヤマ)の銚附の条 見送 <地織綴錦、もやう人物、へり地をり、蝦夷錦>	○

傘鉾	垂衣	地織綴錦	不明	傘鉾（カサボコ）の銚附の条 垂衣（タレキヌ）＜地織綴錦、唐織錦、猩々緋、ぬい等つぎつぎなり＞	
船鉾 （現船鉾）	見送	地織綴錦	龍	船鉾（フネボコ 新町綾小路下ル袋屋町）の銚附の条 見送 ＜地織綴錦、龍のもやう＞	○
橋弁慶山	前掛	地をり	花の丸	橋弁慶山（ハシベンケイヤマ）の銚附の条 前掛 ＜藍地、唐織綴錦、真向龍のもやう。左右金地綴錦、もやう花の丸、尤地をりなり＞	
橋弁慶山	胴幕 （左右）	地をり綴錦	葵まつり	橋弁慶山（ハシベンケイヤマ）の銚附の条 胴幕 ＜左右とも地をり綴錦、葵まつりの模様＞	○
橋弁慶山	見送	地織綴錦	不明	橋弁慶山（ハシベンケイヤマ）の銚附の条 見送 ＜地織綴錦＞	
八幡山	胴幕	地織綴錦	龍	八幡山（ハチマンヤマ）の銚附の条 胴幕 ＜紅地龍、地織綴錦、縁猩々緋＞	○
八幡山	見送	地織綴錦	不明	八幡山（ハチマンヤマ）の宵夜銚の条 見送 ＜地織綴錦、へり猩々緋＞	
鯉山	胴幕	地をり綴錦	人物	鯉山（コイヤマ）の銚附の条 胴幕 ＜地をり綴錦、もやう人物、へり紅地、呉路服蓮、龍の唐縫きりつけ＞	
鈴鹿山	見送	地をり、綴錦	龍	鈴鹿山（ススカヤマ）の銚附の条 見送 ＜地をり、紅地綴錦、龍のもやう、へり猩々緋＞	
観音山 （現北観音山）	見送	地織綴錦	唐子遊	観音山（クハンランヤマ 新町六角下ル町六角町）の銚附の条 見送 ＜地織綴錦、もやう唐子遊＞	○
役行者山	水引	地をり綴錦	唐子あそび	役行者山（エンノキヤウシヤヤマ）の銚附の条 水引 ＜地をり金地綴錦、もやう唐子あそび、此水引綴錦を織たる人ハ西山勘七と称して讃岐国多度郡粟嶋（タトコホリアハシマ）という所の産（サン）なり。幼年の頃より当町内鍵屋嘉兵衛方召仕はれしが天性機織（キショク）の業（ワサ）を好ミけるに、十四・五才の頃京師西陣なる高機（タカハタ）といふものを見てより工夫をなし、ついに綴錦を我朝にて始めて織出せし人なり。夫より古郷にかへり益綴錦ををり出し、今文化八年末六月迄に此水引の綴錦を織出せし也＞	○
船鉾	舳先龍頭 前掛	地をり綴錦	真向の龍	船鉾（フネボコ 森町通四條下ル町四條町）の銚附の条 舳先龍頭前掛（ハサキリヤウトウマヘカケ）＜地をり綴錦、真向の龍＞	○

【註】 橋弁慶山に現存する前掛は、『増補』には左右金地綴錦とあるものの、現存作例では左右に藍地の綴錦がついている。確実に『増補』の記述の作であると確定できないため、現存作例なしとした。

牡丹で、中国製の綴織の図様を写したと思われるものが多い。また『増補細記』には人物としか記されていないため、それらはどのような人物か、記録の上では判然としない。だが実際に祇園祭に伝来する日本製綴織の人物図様を見てみると、それらは中国の民間宗教である道教に基づいた吉祥を司る人物であることが多い。残りの主題も仙人や鳳凰などであることから、この時期に日本製の綴織に用いられていた主題の大半は中国に源泉がある主題で、同じ祭礼に残っている中国製の綴織と同種類とみてよいであろう。

これに対して、明らかに日本の画題であると判断できるのは、京都の上賀茂神社・下鴨神社の祭礼である葵祭を表した橋弁慶山の左右胴幕の1件のみである。先述したように、『増補細記』が記されたこの時期、日本の綴織は中国の綴織を範としながら、大型の綴織を織り出すに至り、技術的にはかなりの習熟の域に至っていたことは明らかである。だが、1件の例外を除き、主題の大半は中国製綴織とほぼ同様であった。中国の作を模倣して綴織の技法を学ぶ時期から、学んだ技法を用いながら日本独自の表現を模索する時期へ転換しはじめるのが、この『増補細記』が記された文化年間（1804-1817）の頃であったと言えよう。

## 祇園祭に伝来する中国製・日本製の裏付けがとれる現存作例

### (a) 中国製の裏付けがとれる現存作例（『増補細記』）

次の作業として筆者は、『増補細記』から浮かび上がった中国製・日本製の作例と、現在山鉾町に伝来している作例を、資料類<sup>20</sup>を用いて照らし合わせた。その結果、1814年の『増補細記』に記されていた45件のうち、中国製の13件、日本製の12件、合わせて25件が、今でも祇園祭に現存していることが判明した。表1・2の現存状況の欄に○印を付けた品が、それにあたる。

### (b) 中国製の裏付けがとれる現存作例（『増補細記』以外）

さらに現在山鉾町に現存する品々を見てゆくと、『増補細記』には記されていないが、中国製ないし日本製であることが明らかな品が複数あることに気づく。そのうち中国製であることが明らかな品を洗い出すと、13件（表3）が上がる。これらの掛物は複数の綴織を接ぎ合わせたもので、主となる裂は中国において官服、椅子の覆い、幡などとして用いられたものである。

例えば、役行者山、黒主山、橋弁慶山、南観音山、鈴鹿山、芦刈山、孟宗山の掛物には、中国で用いられていた龍袍の裂片がはめ込まれていることが、梶谷氏によりすでに指摘されている<sup>21</sup>。これらの裂は龍袍の裁断の形

状を有し、その文様も典型的な龍袍のそれであるため、明らかに中国製である。多くの品は主となる中国製の周囲が別の綴織で埋められ、掛物の形状に整えられている。祭礼に供する掛物の形に整えたのは日本人であるため、周囲の綴織は日本で制作されたものであることは疑う余地がない。これらの作は、中国製と日本製の綴織の特徴を観察するために、大変重要な作と言えよう。

梶谷氏はまた、役行者山の後掛と橋弁慶山の前掛に、中国製の椅子覆いの裂がはめ込まれていることも指摘されている<sup>22</sup>。中国では椅子のつくりに基づいて、3画面から構成される特有の綴織が制作された。役行者山の後掛と橋弁慶山の前掛には、そのような椅子覆いの裂が用いられている。

橋弁慶山の水引は現在横長の形状であるが、当初は縦長の作であったことがわかっており、浅野公造氏はその当初の図様を再構成されている<sup>23</sup>。はぎ目の位置や図様をみてゆくと、本来は縦長の幟か幡かと思われる形状であったことは明らかで、もしこの綴織が日本でつくられたものであるならば、当初から横長の形状に織るはずである。祇園祭には海外から舶載された貴重な品を解きほぐし、時には分断して接ぎ合わせて、山鉾の大きさに合った掛物に仕立て直すことがしばしばあった<sup>24</sup>。橋弁慶山の水引がそのような外来品（中国作品）を改変した作であることは、疑う余地がない。

なお、北観音山の見送は、1986年になってニューヨークの美術商から購入された中国製の掛物である<sup>25</sup>。他の作とは来歴が全く異なるものの、作品状態が極めて良く、当初の色彩がかなり残っているので、参考のためここに加えることにする。

### (c) 日本製の裏付けがとれる現存作例（『増補細記』以外）

さらに、『増補細記』には記されていないが、日本製であることが明らかな祇園祭の現存作例として、占出山の掛物4件（表4）をあげることができる。これらの一次史料に関してはすでに別稿で詳述したためここでは略記にとどめるが、そのうち前掛は生駒によって、胴懸は紋屋次郎兵衛によって、見送は糸屋彦兵衛によって織出されたこと、そしてこれらの織工は京都の人であることが、『祇園会占出山神具入日記』から判明している<sup>26</sup>。

## 祇園祭以外の中国製・日本製の裏付けがとれる現存作例

祇園祭以外の祭礼や日本の博物館にも、生産国が明らかな中国製・日本製の綴織がいくつか伝来している。このような作例をカタログや報告書等から洗い出してみたい。

表3 中国製の裏付けがとれる、祇園祭の現存作例（『増補細記』以外）

所蔵先	掛物種別	織物	主題	以前の用途	その他
橋弁慶山	水引	綴織	唐子	幟か幡か？	縦長の作品を解体・接合し、横長の水引に仕立て直し
北観音山	見送	綴織	唐子	掛物	1986年にニューヨークの美術商から中国製掛物を購入
役行者山	前懸	綴織	龍	椅子覆い	中国の椅子覆いの裂
役行者山	後懸	綴織	龍	椅子覆い	中国の椅子覆いの裂
役行者山	後懸	綴織	龍	官服	中国の官服の裂
黒主山	前懸	綴織	龍	官服	中国の官服の裂、袋中上人が琉球滞在中（103-05）尚寧王から賜る『寄付証状』、日本綴織で埋め合わせ
橋弁慶山	前掛	綴織	龍	官服	中国の官服裂・椅子覆裂 日本綴織で埋め合わせ
南観音山	前掛	綴織	龍	官服	中国の官服の裂の切りつけ
鈴鹿山	見送	綴織	龍	官服	中国の官服の裂 日本綴織で埋め合わせ（証文）
芦刈山	見送	綴織	龍	官服	中国の官服の裂 日本綴織で埋め合わせ
孟宗山	前懸	綴織	龍	官服	中国の官服の裂 日本綴織で埋め合わせ
孟宗山	見送	綴織	龍	官服	中国の官服の裂 日本綴織で埋め合わせ
孟宗山	水引	綴織	花鳥	補子	中国の補子の裂 日本綴織で埋め合わせ

表4 日本製の裏付けがとれる、祇園祭の現存作例（『増補細記』以外）

所蔵先	掛物種別	織物	主題	その他
占出山	前掛	綴織	巖島	織工、生駒『祇園会占出山神具入日記』
占出山	胴掛	綴織	天橋立	織工、紋屋次郎兵衛『祇園会占出山神具入日記』
占出山	胴掛	綴織	松島	織工、紋屋次郎兵衛『祇園会占出山神具入日記』 下絵現存：奥川米巖筆（墨書）米巖（落款）米巖の花押あり 図画（墨書）、米巖（落款の織り込み）あり
占出山	見送	綴織	薩埵富士	同、後掛、薩埵富士図、壺枚、新町六角上ル町、同、糸屋彦兵衛『祇園会占出山神具入日記』 米巖の花押の織り込みあり

表5 中国製の裏付けがとれる現存作例（祇園祭以外）

所蔵先		掛物種別	織物	主題	その他
大津祭	西王母山	見送	綴織	唐子	順天府所製、寛政4（1792）に祇園祭の鷹山より購入（箱書、証文）
大津祭	源氏山	見送	綴織	唐子	漢国産（箱書） 享保11（1726）に京都の万屋弥右衛門より入手（証文）
大津祭	源氏山	前掛幕	綴織	草花、蝶 （曙錦）	漢国産（箱書） 文政元年（1818）年に補修（箱書）
大津祭	源氏山	左右胴懸	綴織	草花、蝶 （曙錦）	漢国産（箱書） 文政元年（1818）年に補修（箱書）

(a) 中国製の裏付けがとれる現存作例（祇園祭以外）

これらのうち中国製であることが明らかな品が4件（表5）あるが、これらはすべて大津祭の掛物である。滋賀県大津市の天孫神社の秋の祭礼である大津祭は、江戸初期の慶長 - 元和年間（1596-1624）にその起源があるとされている<sup>27</sup>。三つの車輪に支えられた曳山を寛永十五年（1638）頃から祭礼に用い、次第にからくりが取り付けられて、現在の姿になっていった。幕末までは14基が、現在は13基の曳山が巡行している。祇園祭のからくり人形の影響などを受け、すべての曳山にからくりが現存し、祇園祭の山鉦同様に様々な歴史的懸装品で装飾されている。

ちなみに、大津祭の作は前述した2019年の拙稿では取り上げていなかったため、以下大津祭の作の箱書や文書に関して詳しく述べてゆきたい。

大津祭に現存するこれら4件の綴織のうち、西王母山と源氏山の見送に唐子嬉遊図が表されている。西王母山の見送の箱書には「得順天府所製百兒綴錦」「寛政壬子秋八月既望」の記述が含まれている<sup>28</sup>。これにより西王母山の作は当時順天府が置かれていた北京で生産されたことが明らかで、「寛政壬子」、すなわち寛政四年（1792）に西王母山によって入手されたことがわかる。また、寛政四年の『順天府織百兒綴錦代金調達并銀子割戻帳』に「京都鷹山町ヨリ求ル并譲■」とあり、この作は京都の祇園祭の鷹山から求められたとされている。山下絵美氏はこの件に関して鷹山関係の史料を逍遙して関連記録を探されたが、鷹山がこれを売ったという証文は見つからなかったとのことで、どのような形で鷹山がこの件に関わったのかははっきりわかっていない<sup>29</sup>。

一方、源氏山の唐子嬉遊図の見送はやや複雑である。筆者はこの作を調査したが、一つの箱の中に大変よく似た2枚の唐子嬉遊図の綴織の見送が収納されている。そのうち1枚は現在本祭に用いられており、もう1枚は宵宮に用いられている。収納箱の墨書に、「源氏山壁代漢国産百

兒戯図」（箱表）、「享保十一丙午歳菊月上澣」（箱裏）とあり<sup>30</sup>、この箱書から享保十一年（1726）の時点で源氏山に中国製の唐子嬉遊図の品が存在していたことがわかる。また「見送代銀請取手形」と題された以下の売渡証文も残っている<sup>31</sup>。

売上 一札  
一銀壺貫三百五拾目  
右者唐織錦 壺端  
長さ七尺六寸よこ五尺六寸六分 但し唐子遊模様也  
（中略）  
享保十一丙午年 京七条通からす丸東へ入町  
十月六日 万や弥右エ門  
大津中ノ京町  
御衆中様

これにより、この品が享保十一年に京都の万や弥右エ門から大津の中ノ京町に売られたものであることが判明している。さらに、嘉永四年（1851）から嘉永七年（1854）の記録である『修覆諸入用帳』に「先年百兒見送り新綴り之節、生駒旅宿入用、吉田屋徳兵衛払」とある<sup>32</sup>。唐子見送の新綴の際に生駒の宿泊費用を吉田屋徳兵衛が払ったとのことであるが、ここでいうところの「見送り新綴」が「新たに織り出された見送の綴織」なのか、「新たに見送に仕立てられた綴織」なのか、よくわからない。だが、以上の箱書と証文から、2枚のうち1枚は享保十一年に京都から購入した中国の品で、もう1枚はその後の嘉永四年から七年の間に新たに見送となった品であることは確実である。

実際に残っている2枚を観察すると、織物の状態が著しく異なっており、1枚は古い作で、もう1枚はそれより後につくられた作であることは誰の目にも明らかである。従って、現在本祭に用いられている古い品の方が、享保十一年に購入された中国製であると判断することができる。

問題は、もう1枚の宵宮の品を、先に挙げた『修覆諸入用帳』の記述から日本製としてよいかどうかであるが、生駒（京都の織工の生駒か？）という人物に宿賃が払われたということはわかるが、この記載だけでは生駒がこれを制作した、従って日本製であるとまで言い切ることは難しい<sup>33</sup>。本論は日本製の裏付けがとれる作を洗い出すことが目的であるため、現時点では慎重を期して、宵宮の品を日本製の表に含むことは差し控えたいと思う。

さらに源氏山には、曙（あけぼの）のように青から赤へぼかした背景に、草花や蝶が配された綴織も現存している。これらは前掛と左右の胴幕で、収納箱に以下の墨書がある。「源氏山幕漢国産曙錦草花戯蝶図、湖南中京街所蔵」（箱蓋表）、「文政元年戊寅秋九月補修舊幕故作、新函以襲貯之」（箱裏）<sup>34</sup>。これにより、これらの幕は中国製であり当時は曙錦と称されていたこと、文政元年（1818）に旧幕を補修して新しい箱を作って納めたこと、従って制作時期は文政元年以前であることがわかる。

#### (b) 日本製の裏付けがとれる現存作例（祇園祭以外）

以上、中国製の裏付けがとれる作に関して述べてきたが、次に日本製の裏付けがとれる作に関して記したい。これらは計7件（表6）である。

そのうち2件は大津祭の作で、第一の作は上述した源氏山の中国製の曙錦の綴織と関連している。源氏山には、ぼかした背景に草花や蝶が配された曙錦の綴織が、計4幕ある。そのうち3幕（前掛1枚、左右の胴懸2枚）は先述した中国製だが、残る1幕（後掛）は織幅・配色・モチーフの配置が中国製の3幕と相違しており、糸の

状態も比較的新しい。

これらの曙錦の綴織幕は金具によってとめつけられるが、その金具の箱書に文化一四（1817）年の年紀が記されている<sup>35</sup>。この文化一四年の『修覆諸入用帳』に以下の記載があり、曙錦の綴織の金具を作った鋳師は、中川半兵衛であることが窺われる<sup>36</sup>。

一壹貫文 鋳師 中川半兵衛  
 小方職人  
 右同断ニ付為祝儀遣  
 一金千五百疋 並河来章  
 画料  
 一金五百疋 右同人方  
 後幕下絵幕メ下絵

さらにこの記録には中川半兵衛とともに並河来章の名が記されており、来章は後幕の下絵も描いたことが知れる。従って、他の3点と異なる特徴を有す曙錦の後幕は、並河来章の下絵による日本製に該当すると考えるのが妥当である。

第二の大津祭の作は、龍門滝山に伝来する仙人が表された綴錦見送幕である。この作には寛政四年（1792）の購入時の証文が残っており<sup>37</sup>、さらに以下の町内文書も残っている<sup>38</sup>。

寛政四年子九月神事調物  
 覚  
 一金六拾両 綴錦見送幕 京 林瀬平

表6 日本製の裏付けがとれる現存作例（祇園祭以外）

所蔵先		掛物種別	織物	主題	その他
大津祭	源氏山	後懸	綴織	草花、蝶（曙錦）	文化十一四（1817）年、下絵は並河来章（文書）
大津祭	龍門滝山	見送	綴織	仙人	寛政四年（1792）、林瀬平綴錦（証文）
今宮祭	澤瀉町	吹散	綴織	仙人	文政五年（1822）、藤原基近、花押の織り込み
今宮祭	澤瀉町	吹散	綴織	人物（蘭亭曲水）	安政二年（1855）、双岡亭忠之の織り込み
今宮祭	澤瀉町	吹散	綴織	唐子	文政四年（1821）、桜井基近の織り込み
国立歴史民俗博物館		水引	綴織	十六葉菊、桐、鳳凰	文政十丁亥年（1827）、會津若松住、洪井楮之吉、同、忠五良、加藤平治、織之。（水引の墨書）
京都国立博物館		半切	綴織	唐花	嘉永二年（1841）仕立、会津国産、肥後守より寄進（畳紙墨書）

代三貫四百九拾八匁  
 一百式拾九匁 右同人  
 増銀  
 一百四拾五匁 松屋久蔵  
右瀬平綴錦詠方度々京登り  
相對被致候二付挨拶として 礼銀  
渡ス  
 (中略)  
 一式拾五匁 金屋太兵衛  
見送仕立代

これによると、寛政四年に京都の林瀬平に綴錦見送幕の代金が支払われた。瀬平の「綴錦の詠」に際して、松屋久蔵が度々京に赴いて瀬平に挨拶として礼金を渡した。そして、金屋太兵衛に見送の仕立代が払われた。以上から、瀬平の「綴錦の詠」とは、綴錦の見送を仕立てたのではないことは明らかで、綴錦を制作したととることができる。龍門滝山には、仙人が表された綴錦とヨーロッパのタペストリー以外の見送幕がないため、林瀬平が制作した綴錦とは、この仙人の作であるとみてよい<sup>39</sup>。林瀬平は京都の西陣にいた織屋で、後に会津藩に招かれた<sup>40</sup>。この作はその瀬平が大津祭のために制作した綴織とみられ、大変貴重な作である。この瀬平に関しては、後に再度ふれることにする。

さらなる3件は、今宮祭の伝来品である。今宮祭は京都市北区紫野今宮町にある今宮神社の春の祭礼である<sup>41</sup>。今宮祭に鉦を出す主要な地域は西陣と呼ばれ、織物関係の人々が住む地域である。平安時代に疫病や災害が起こり、神泉苑、祇園社、上御霊神社、下御霊神社などで疫病を鎮める御霊会が営まれたが、今宮祭も正暦五年(994)に船岡山で行われた御霊会が起源とされている。長保三年(1001)に御霊会の場所が紫野に移され、社殿が建造され、人々はこの社を今宮(新しく祀った社)と呼んだ。これは古くからこの地で祀られていた疫社に対する呼び名であったと考えられている。江戸時代には将軍徳川綱吉の生母の桂昌院がこの地域の出身であることから、今宮祭はその庇護を受けて発展した。祭礼の際は神輿が地域を渡御し、鉦も巡行するが、戦後数年までは12の町内が鉦を出し、現在は9つの町内が鉦を出している。今宮祭では祇園祭のような山鉦は出さず、剣鉦を持って練り歩く。剣の形をした鉦の下に金属の鏝(かざり)をつけ、それを長い棒の先につける。その棒に吹散(ふきちり)という帯のように長い染織品を下げ、鈴(りん)をつけて、鳴らしながら歩いてゆく<sup>42</sup>。この吹散に、貴重な染織品が用いられているのである。

今宮祭の3件はいずれも澤瀉鉦の吹散で、その主題は、

唐子、仙人、蘭亭曲水の図である。各吹散に製作年と作者名が織り込まれている。それぞれ文政四年(1821)、文政五年(1822)、安政二年(1855)の年紀があり、桜井基近、藤原基近、双岡亭忠之の名が見られる。桜井基近と藤原基近は花押も織り込まれているが、それが同一であることから、両者は同一人物で、桜井基近は藤原基近の別称であったと思われる<sup>43</sup>。

残る2件は当初の所蔵者を離れ、京都国立博物館と国立歴史民俗博物館に収蔵されている。京都国立博物館所蔵の品は大胆な唐花文様が織り出された綴織の半切(はんぎり)袴で、この品は加賀藩の前田家に旧蔵されていた<sup>44</sup>。その豊紙に以下が記されている。

嘉永二巳酉七月御仕立被仰付  
 五十八  
 御半切 津々連織  
 会津御国産従  
 肥後守様被進之  
 御地色黄茶蝶唐花  
 牡丹から花

会津の国で制作され、嘉永二年(1849)に仕立てられ、肥後の守より寄進されたことがわかる。当時肥後の守であったのは、会津藩主の松平容敬(かたたか)である。この品が旧蔵されていたのは加賀藩の前田家であるが、十三代藩主の前田斉泰(なりやす)の妹の厚姫は、肥後の守であった容敬に嫁していた。斉泰と容敬は義兄弟の関係にあり、そのような間柄から、肥後の守に任じられていた会津藩主より前田家へ会津の品が寄進されたものと思われる<sup>45</sup>。

他方、国立歴史民俗博物館所蔵の品は、菊や桐の紋とともに鳳凰や麒麟が織り出された綴織の水引で、それには以下が記されている<sup>46</sup>。

文政十丁亥年 會津若松住  
 渋井椿之吉  
 同 忠五良  
 加藤平治  
 織之

これにより、この水引は文政十年(1827)に会津において、渋井椿之吉、渋井忠五良、加藤平治によって織られたことがわかる。この品はモチーフが天皇の装束の袍に専用のものであるため、神宮関係の水引と推定されている<sup>47</sup>。

以上に挙げた京都国立博物館所蔵の作も国立歴史民俗博物館所蔵の品も、どちらも会津でつくられたということは特に注目に値する。この背景には、井筒屋瀬平が関連しているものと思われる。『西陣天狗筆記』（奥書弘化二年・1845）によると、井筒屋瀬平は西陣北船橋町で綴錦を工した人で、後に会津公の扶持になった<sup>48</sup>。『祇園会占出山神具入日記』（宝暦版）には西陣飛鳥井町の林瀬平が織った花鳥文様の綴織の見送幕が、寛政六年の年紀とともに記録されている<sup>49</sup>。藤井健三氏は『西陣天狗筆記』の井筒屋瀬平と、『祇園会占出山神具入日記』の林瀬平はともに織工で住所が近いため、おそらく同一人物であろうと推定されている<sup>50</sup>。なお、先に挙げた大津祭の龍門滝山に現存する仙人図綴織の制作者はこの林瀬平で、大津祭の作は瀬平の作風を知ることができる貴重な作であることは、先述した通りである。

上述したように『西陣天狗筆記』に、瀬平は会津公から俸禄を受けて抱えられた旨が記されていることから、京都で綴織を織っていた瀬平はいずれかの時期に京都を離れて会津に向かい、会津でも綴織を織ったものと思われる。前田家伝来（京都国立博物館所蔵）の唐花文様綴織は、瀬平が会津に移ってからの作か、あるいはその弟子たちの作の可能性が高いであろう。また、国立歴史民俗博物館所蔵の菊桐鳳凰麒麟文様綴織を制作した渋井楮之吉、渋井忠五良、加藤平治は、瀬平に学んだ者たちである可能性が考えられる。日本製の綴織の大半は京都で制作されたものと思われるが<sup>51</sup>、一部にはこのような会津製の品がある点は、注意を要することである。

### 中国製・日本製の裏付けがとれる、日本現存の17-19世紀の綴織

最後に、以上の結果をすべて統合し、中国と日本で制作されたことが確実に裏付けられる、17世紀から19世紀中期（江戸末まで）の綴織の現存作例をまとめた。その結果、それらは総計53件（表7）に達した。それらの主題は主に龍、唐子、花鳥、人物、日本画題に大別できる。実際に調査を行うと、祭礼の様々な条件や作品の傷み具合などから、調査がかなわないものが多数出てくるであろう。だが、日本において中国の綴織を模しながらどのように綴織が制作されていたのかを考察する第一段階としては、この表に上がった品々は十分な数量と言える。以上の現存作品は、確実性の高い調査を始めるために管見の限り選び出したものであり、今後調査が進展するに従って、さらなる品々が浮上してゆくものと思われる。

### おわりに

本論では『増補細記』を詳細に検討し、それが記された1814年の時点で祇園祭の中に中国製の綴織が19件、日本製の綴織が26件、あわせて45件あったことを明らかにした。中国製の綴織はそのうち10件が見送に、4件が前掛に、3件が胴幕に、2件が水引に供され、日本製の綴織は11件が見送に、7件が胴幕に、3件が前掛に、3件が水引に仕立てられていた。そして当時綴織は数ある染織品の中で大変価値が高い品であると受けとめられていたこと、1814年にはすでに広幅で大型の綴織を多数織り出すことができるほど、日本の綴織技術が向上していたことを導き出した。これらの綴織を主題別に分けると、中国製の綴織は龍が6件、花鳥が5件、唐子が3件、花卉が3件、仙人が2件であり、日本の綴織は龍が8件、人物が4件、花鳥が3件、唐子が3件である。日本製の綴織に用いられていた主題の大半は同じ祭礼に残っている中国製の綴織とほぼ同種類とみてよいこと、明らかに日本の画題であると判明するのは葵祭の1点のみであることなどの諸点を総合的に考察した結果、中国の作を模倣しながら綴織の技法を学ぶ時期から、学んだ技法を用いて日本独自の表現を模索する時期へ転換しはじめるのが、『増補細記』が記された文化年間（1804-1818）の頃であることが浮かび上がった。

また『増補細記』の計45件のうち、中国製の13件、日本製の12件、合わせて25件が、今でも祇園祭に現存していること、『増補細記』には記されていないが、中国製ないし日本製であることが明らかな祇園祭の現存作例として、13件の中国製品、4件の日本製品があることがわかった。

さらに、祇園祭以外に目を向け、中国製・日本製であることが裏付けられる綴織の現存作例を探したところ、中国製が4件、日本製が7件上がってきた。中国製4件はすべて大津祭の伝来品だが、日本の品は、2件が大津祭、3件が今宮祭の伝来品で、残りの2件は当初の所有者の手を離れ、現在は京都国立博物館と国立歴史民俗博物館に所蔵されている。このうち龍門滝山の仙人図綴織見送、京都国立博物館蔵（前田家伝来）の唐花文様綴錦半切、国立歴史民俗博物館蔵の菊桐麒麟送子鳳凰模様綴織水引の3点は、井筒屋瀬平（林瀬平）との関連が想起される品として注目され、後者2点は会津で制作されたことがわかる重要な作例である。

以上の結果をすべて統合し、中国と日本で制作されたことが裏付けられる17世紀から19世紀中期の綴織の現存作例をまとめたところ、それらは総計53件に達し、その主題は主に龍、唐子、花鳥、人物、日本画題であることが明らかになった。

表7 中国製・日本製の裏付けがとれる、日本現存の17-19世紀中期の綴織

祭礼	所蔵先	作品名称	主題	制作地	産地情報	関連年代	その他
祇園祭	木賊山	牡丹鳳凰文見送	花鳥	中国	唐織 (増補)		
祇園祭	黒主山	鳳凰と牡丹の図見送	花鳥	中国	唐織 (増補)	1764 (宝暦14) 新調、裏地墨書	
祇園祭	占出山	鳳凰牡丹丹紋見送	花鳥	中国	唐織 (増補)	1699 (元禄12) 祇園会占出山神具入日記に該当か	輸出用
祇園祭	北観音山	牡丹梅笹唐草文様綴織水引	花鳥	中国	唐織 (増補)	1785 (天明5) 寄進、観音山寄進帖	
祇園祭	役行者山	岩に牡丹と蝶の図綴織前懸	花鳥	中国	唐をり (増補)		
祇園祭	黒主山	花卉胡蝶文様曙織綴織胴掛	花蝶	中国	唐織 (増補)		曙錦
大津祭	源氏山	花蝶文様曙織綴織前掛幕	花蝶	中国	漢国産 (箱書)	1818 (文政1) 補修、箱書	曙錦 (箱書)
大津祭	源氏山	花蝶文様曙織綴織胴幕	花蝶	中国	漢国産 (箱書)	1818 (文政1) 補修、箱書	曙錦 (箱書)
祇園祭	孟宗山	飛鳥山水模様綴織水引	花鳥	中国 日本			中国官服製と日本綴織
祇園祭	占出山	牡丹鳳凰文様綴織見送	花鳥	日本	地織 (増補)		
祇園祭	伯牙山	池水景水鳥文様綴織胴掛	花鳥	日本	地をり (増補)		
大津祭	源氏山	花蝶文様曙織綴織後掛	花蝶	日本		1817 (文化14) 文書	曙錦 下絵: 文化14年、並河来章 (文書)
	国立歴史民俗博物館	菊桐麒麟鳳凰模様綴織水引幕	花鳥	日本 会津	会津若松 (墨書)	1827 (文政10) 製織、墨書	文政十丁亥年、會津若松住、渋井楮之吉、同 忠五良、加藤平治、織之。(墨書)
	京都国立博物館	黄地唐花文様綴織半切	唐花	日本 会津	会津国産 (畳紙墨書)	1849 (嘉永2) 仕立、畳紙墨書	肥後守より寄進 (畳紙墨書)
祇園祭	鈴鹿山	長寿福禄図綴織前掛	人物	中国 日本	唐織 (増補)	中国製は1728 (享保13) 以前の作、文書・墨書 日本製は1828 (文政11) の作、文書・墨書	
祇園祭	鈴鹿山	長寿福禄図綴織胴懸 (左右)	人物	中国 日本	唐織 (増補)	中国製は1728 (享保13) 以前の作、文書・墨書 日本製は1828 (文政11) の作、文書・墨書	
祇園祭	保昌山	寿星図綴織見送	人物	日本	地織 (増補)	1798 (寛政10) 裏地銘文織込	
祇園祭	孟宗山	西王母寿老人図綴織胴掛 (左右)	人物	日本	地をり (増補)		
祇園祭	伯牙山	苑中八仙人図綴織見送	人物	日本	地織 (増補)		
大津祭	龍門滝山	仙人図綴織見送 (宵宮用)	人物	日本	林瀬平綴織 (証文)	1792 (寛政4) 証文	林瀬平、証文
今宮祭	沢瀉町	蘭亭曲水図綴織吹散	人物	日本		1855 (安政2) 織込	双岡亭忠之、織込
今宮祭	沢瀉町	群仙図綴織吹散	人物	日本		1822 (文政5) 織込	藤原基近、織込
祇園祭	北観音山	唐子嬉遊図綴織見送	唐子	中国		1986 にニューヨークの美術商から購入	
祇園祭	黒主山	嬉遊百子園の図綴織見送	唐子	中国	唐織 (増補)	1700 (元禄13) 新調、以前の裏布の墨書	
祇園祭	八幡山	嬉遊百子園の図綴織見送	唐子	中国	唐織 (増補)		
祇園祭	橋弁慶山	唐子嬉遊図綴織水引	唐子	中国		1808 (文化5) 購入、証文	縦長の作品を解体・接合
大津祭	西王母山	百子嬉遊図綴織見送 (本祭用)	唐子	中国	順天府所製 (証文)	1792 (寛政4) 購入仕立、証文	祇園祭鷹山より購入

大津祭	源氏山	唐子嬉遊図見送（本祭用）	唐子	中国	漢国（箱書）	1726（享保11）入手、証文	
祇園祭	役行者山	唐子嬉遊図綴織水引	唐子	日本	地をり（増補）	1811（文化8）、増補	西山勘七作、増補
祇園祭	北観音山	唐子嬉遊図綴織見送	唐子	日本	地織（増補）	1808（文化5）完成、観音山寄進長	
今宮祭	沢瀉町	唐子遊図吹散	唐子	日本		1821（文政4）織込	桜井基近作、織込
祇園祭	橋弁慶山	加茂葵祭行列図綴織胴懸	日本画題	日本	地をり（増補）	1809（文化6）箱底裏墨書	下絵、円山派（推定）
祇園祭	占出山	巖島図綴織前掛	日本画題	日本京都		1831（天保2）祇園会占出山神具入日記	生駒作、祇園会占出山神具入日記
祇園祭	占出山	天橋立図綴織胴掛	日本画題	日本京都		1831（天保2）頃	紋屋次郎兵衛作、祇園会占出山神具入日記
祇園祭	占出山	松島図綴織胴掛	日本画題	日本京都		1831（天保2）頃	下絵：奥川米巖筆（墨書） 米巖（落款）、花押 図画（墨書）、米巖（落款織込） 紋屋次郎兵衛作、祇園会占出山神具入日記
祇園祭	占出山	薩埵富士図綴織見送（後掛から仕立直）	日本画題	日本京都		1831（天保2）頃 1979（明治24）以前仕立直	米巖の花押の織込 糸屋彦兵衛作、祇園会占出山神具入日記
祇園祭	船鉾	波濤に飛龍文様綴織前懸	龍	中国	唐織（増補）	1873（安永7）寄進、南北袋屋町祇園会寄進帳	椅子覆の断片
祇園祭	山伏山	飛龍に波濤の図綴織見送	龍	中国	唐織（増補）		
祇園祭	役行者山	雲龍波濤図綴織胴懸（左右）	龍	中国	唐織（増補）		調査報告書2012なし、山鉾所蔵品目録2002あり
祇園祭	役行者山	波濤に飛龍文様綴織前懸	龍	中国			中国椅子覆裂
祇園祭	役行者山	波濤に飛龍文様綴織後下懸	龍	中国			中国椅子覆裂
祇園祭	役行者山	波濤飛龍文様綴織後掛下掛	龍	中国			中国官服裂
祇園祭	南観音山	波濤飛龍文様綴織前掛	龍	中国			中国官服裂
祇園祭	橋弁慶山	雲龍波濤文様綴織前掛	龍	中国 日本			中国官服裂・中国椅子覆裂・日本綴織
祇園祭	鈴鹿山	波濤飛龍文様綴織見送	龍	中国 日本		1816（文化13）日本部分、町内証文	中国官服裂
祇園祭	芦刈山	波濤飛龍文様綴織見送	龍	中国 日本			中国官服裂・日本綴織
祇園祭	孟宗山	波濤に飛龍文様綴織前懸	龍	中国 日本			中国官服裂・日本綴織
祇園祭	孟宗山	波濤に飛龍文様綴織見送	龍	中国 日本			中国官服裂・日本綴織
祇園祭	黒主山	波濤飛魚文様綴織前懸	龍	中国 日本		1603-05年袋中上人琉球滞在中尚寧王から賜る、寄付証状	中国官服裂・日本綴織
祇園祭	船鉾	雲龍に青海波図綴織見送	龍	日本	地をり（増補）		
祇園祭	八幡山	昇龍文様綴織胴掛（2枚）	龍	日本	地織（増補）		
祇園祭	太子山	雲龍波濤文様綴織水引	龍	日本	地織（増補）	1814（文化11）増補	
祇園祭	大船鉾	雲龍波濤文様綴織前掛	龍	日本	地をり（増補）		

日本に現存する中国製の綴織とその日本製コピーをより確実に識別するために、ここにとりまとめた作品リストにもとづきながら、筆者は綴織の実物調査を進めている最中である。今後は主題別にこれらの作品の特徴を明らかにし、中国製の綴織を範としながら日本でどのように綴織が立ち上がっていったのか、その一端を浮かび上がらせてゆきたいと思う。

### 【Acknowledgement 謝辞】

吉田孝次郎先生、梶谷宣子先生、藤井健三先生、河上繁樹先生、小寄善通先生、山川暁先生、田島達也先生、山口敬一事務局長、上田公代氏、福持昌之氏、安井雅恵氏、山下絵美氏、柿本雅美氏、和田光生氏、高谷尊士会長、柴山久樹会長、本郷勝巳町会長。

### 【附記】

本研究はJSPS日本学術振興会科学研究費、基盤研究(c)、課題番号17K02319の助成を受けて実施した。ロシアのキスロヴォーツクで開催されたシルク・ロード染織研究国際連盟シンポジウム(International Association for the Study of Silk Road Textile Symposium)において2019年9月に発表した内容の前半部分を和訳し、修正加筆したものである。

### 註

- 1 拙稿「一次史料に見る日本製の江戸時代の綴織」『京都市立芸術大学 研究紀要』62号、2018、pp.23-34。
- 2 貞観十一年(869)の成立とする説は『祇園社本縁録』からなるものだが、近世中期以降の説であるとしてこれを否定し、天禄一年(970)、天延二年(974)、天延三年(975)のいずれかであるとする説もある(久保田収『八坂神社の研究』神道史学会、1974、pp.59-84)。
- 3 植木行宣『山・鉾・屋台の祭り』白水社、2001、pp.61-67。
- 4 同書、p.76。
- 5 若林史明『祇園会山鉾大鑑』八坂神社、1982。
- 6 同書、p.1427、北観音山の見送の項。
- 7 太田英蔵『綴錦』『祇園祭染織名品集』芸艸堂、1970、pp.13-16。
- 8 同書、p.15。
- 9 田中緑紅『京祇園会の話』緑紅叢書2の3、京を語る会西陣支部、1958。
- 10 祇園祭山鉾連合会『祇園祭山鉾懸装品調査報告書-渡来染織品の部』祇園祭山鉾連合会、2012。
- 11 祇園祭山鉾連合会『祇園祭山鉾懸装品調査報告書-国内染織品の部』祇園祭山鉾連合会、2014。
- 12 河上繁樹「曳山を彩る幕-大津祭の懸装品」『町人文化の華-大津祭』大津市歴史博物館、1996、pp.29-34。
- 13 藤田吉右衛門貞栄『増補祇園会細記』上、文化十一年(1814)奥書、役行者山所蔵。
- 14 同上の凡例。
- 15 綴織の江戸時代の表記に関しては、拙稿、前掲書、2018、pp.24-26を参照。
- 16 祇園祭山鉾連合会、前掲書、2014、pp.50, 128。

- 17 唐子は、百子(多くの唐子を描いたもの)を含む。
- 18 牡丹、牡丹と蝶、草花と蝶の3件。
- 19 それ以外の4件は主題の記載がなく、主題不明。
- 20 祇園祭山鉾連合会、前掲書、2012; 祇園祭山鉾連合会、前掲書、2014。
- 21 祇園祭山鉾連合会、前掲書、2012、pp.119-128。
- 22 同書、pp.128-131。
- 23 同書、pp.132-133。
- 24 典型的な例として、フランドル製のタペストリーを分断してつなぎ合わせた鯉山の作品があげられる。
- 25 祇園祭山鉾連合会、前掲書、2012、pp.111-113。
- 26 拙稿、前掲書、2018、p.31。
- 27 大津祭の概要に関しては、以下を参照。大津市歴史博物館『町人文化の華-大津祭』大津市歴史博物館、1996。
- 28 大津市教育委員会『大津祭総合調査報告書14 西王母山』1978、pp.37-39。
- 29 山下絵美「大津祭・西王母山見送幕」祇園祭山鉾連合会『放鷹-祇園祭鷹山復興のための基本計画』祇園祭山鉾連合会、2018、p.72。
- 30 大津市教育委員会『大津祭総合調査報告書9 源氏山』1975、pp.32-33; 大津市教育委員会『大津曳山祭総合調査報告書』大津市教育委員会、2015、p.318。
- 31 大津市教育委員会、前掲書、1975、pp.32-33; 大津市教育委員会、前掲書、2015、p.318。
- 32 大津市教育委員会、前掲書、2015、p.318。
- 33 2015年の大津市教育委員会の報告書では、織物や図様の特徴や、先に挙げた『修覆諸入用帳』の「先年百兒見送り新綴り之節、生駒旅宿入用、吉田屋徳兵衛弘」の記載から、宵宮の品は日本製と推定されている(大津市教育委員会、前掲書、2015、p.318)。なお、大津市教育委員会の1975年の報告書は、この作を中国製と推定している(大津市教育委員会、前掲書、1975、p.33)。
- 34 大津市教育委員会、前掲書、1975、p.34; 大津市教育委員会、前掲書、2015、p.319。
- 35 大津市教育委員会、前掲書、1975、p.34。
- 36 同上。
- 37 大津市教育委員会『大津祭総合調査報告書4 竜門滝山』、1973、pp.30-31。
- 38 大津市教育委員会、同書、p.31。ただしこの報告書では、この作は中国製で明初の作とされている。
- 39 大津市教育委員会、前掲書、2015、pp.312-313。
- 40 藤井健三「織工・林瀬平の作品と我が国最初の綴織」『耕雲』5号、西陣織物館、1999、p.21; 拙稿、前掲書、2018、pp.25, 28-29。
- 41 今宮祭に関して、以下を参照。内田みやこ「紫野今宮神社今宮祭」京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編・発行『京都剣鉾のまつり調査報告書』2 民俗調査編、2014、pp.23-27。
- 42 京都市社会教育振興財団『剣鉾の伝統展』京都市社会教育振興財団、1986、p.16。
- 43 京都市文化観光局文化財保護課『京都市の文化財』京都市文化観光局文化財保護課、1992、p.97。
- 44 本作に関しては以下を参照。山内麻衣子「肥後守から贈られた綴織」『金沢能楽美術館春季特別展 京都国立博物館蔵能装束展』パンフレット、裏表紙、金沢能楽美術館、2010。
- 45 同上。
- 46 国立歴史民俗博物館『時代を語る染と織』国立歴史民俗博物館、1997、p.103。
- 47 同上。
- 48 井関政因撰『西陣天狗筆記』弘化二年奥書(原田伴彦編『日

本都市生活史料集成一三都篇Ⅰ』学習研究社、1977、p.360)。  
49 『祇園会占出山神具入日記』宝暦十一年、占出山町所蔵。

50 藤井健三、前掲書、1999、p.21。  
51 日本製綴織の制作者に関しては、拙稿、2018を参照。

